

末黒野

すぐろの

10月号 (通巻830号)



夏つばめ

小川 玉泉

(名譽主宰)

廃校の廊下飛び交ひ夏つばめ
郵便を配るは乙女蟬の昼
朝蟬の声よく通ひ勝手口
残る日へ声を桜樹の油蟬
白百合や空の青さの深まりぬ
縁に坐し蟬聞き分くる夕ごころ

廃校の廊下飛び交ひ夏つばめ

わが国の平均寿命は、女性86・83歳で世界一。男性80／50歳で世界三位になった。長寿を手放しには喜んでおられない。後に続く若い層の少ないことが問題である。すでに廃校になった小中学校が多い。句会場の廃校の中学校で目撃したのが、この句である。燕にとつては、もつてこの環境である。すっかり育った親子が長い廊下を飛び交う姿に一抹の不安を感じた。

油照

炎 天 や 島 の 離 さ ぬ 雲 一 朶
尾 根 尾 根 の 鉄 骨 武 骨 油 照
ほ と ぼ り の 冷 め ぬ ビ ル よ り 夏 の 月
炎 暑 の 路 地 男 言 葉 の 女 子 生 徒

松本三千夫

空母見ゆる海の公園月涼し
怠惰の四肢置き所なし熱帯夜
夏の夜の樹々の葉音や饒舌に
五色豆音立てて噛む大暑かな
明六つの大暑の鴉よく啼けり
汗滂沱薬缶の口に口つけて
日を恋ひて森へ還らず梅雨の蝶
蜘蛛の囿を透けて夕日の真つ赤つ赤

時計草

黒滝志麻子

(副主宰)

かく降りて禽声あをむ男梅雨
青涼し耳に揺らしてトルコ石
外に出でて風の新たや夏帽子
貝がらの形のパス夕夏夕べ
馬子唄の声出さうな峠風青し
夾竹桃海とろとろと真昼どき
底なしの沼に生まれて水馬
夏さぶの露地行灯の艶めきぬ
合唱にタクトはいらぬ夏蛙
緑蔭や言葉のいらぬ時流れ
ときをりの風の振子まく時計草
万緑の底ひに沈み藁屋の灯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

百合の花

森清信子

シスターと積もる話や薔薇の園
夕照に翳りを深め白菖蒲
翻るとき輝き夏燕
久びさに晴れたる大地ラベンダー
黒牛のぬつと現はれ夏の霧
撓むまで潮風を浴び百合の花
行々子水音を消す草の丈
明日はしぼむうすむらさきの花菖蒲
病むごとく雲の朱滲み蚊喰鳥
富士暮れて軒先くれて冷し酒

短夜

安斎久英

おが屑に蠢く蟹や桜桃忌
心地よき風の高原青田波
ざざ降りや湯宿の玻璃の火取虫
波音や灯台までの額の花
四阿に忍び音のごと虎が雨
夏深しダム湖神秘の紺湛へ
碑文読みをれば背山をほととぎす
噴水や迷ひ銜ひのなき穂先
短夜や旅寝の夢の繋がらず
落葉松の梢晩夏の雲捉ふ



青田波

石黒興平

三度目のスイッチバツク濃紫陽花
棹を櫓に櫓をまた棹に花菖蒲
すれ違ふ相合傘や濃紫陽花
稚見せに姪の土産のさくらんぼ
得意気に打つて見せたる草矢かな
涼しさや葬儀無用の遺言書
青蘆の一叢に風とどまれり
軒下に月面のあり蟻地獄
手びさしに入る江の島青葉潮
渡りゆく風の形みせ青田波

梅雨に入る

大橋伊佐子

海茫茫山茫茫と梅雨に入る
嵯峨の路竹の戦ぎも梅雨に入る
夏は来ぬ独り居の椅子広縁に
恙なき一人暮しや籐寝椅子
ふるさとの夜の深さや青葉木菟
レガッタの若き裸身に夏日燃ゆ
玫瑰や砂丘につづく靴のあと
星空の一隅に梅干しにけり
高原の牧の起伏や雲の峯
われ逝かば反古となるらん書を曝す

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



風涼し

岡田史女

炎天を抜け来し蹠ほてるかな
郷愁や花つき胡瓜かじりては
一人来て又一人来て夏炬かな
入母屋の奥の書院や風涼し
明日開くひらくと風の蓮かな
烏瓜師を訪ふ坂のくらがりに
凌霄や胸中にまだ燃ゆるもの

風鈴

岡野里子

高階へ色押し上ぐる樟若葉
低く飛ぶはぐれ螢のひかりかな
仁王門紫陽花の毬百二百
胸に朱の残る仁王や五月雨
ビル街の十坪の空地竹煮草
虞美人草空青ければ紅の濃く
揺れやまぬ貝風鈴や日のまだら

菖蒲

加藤静江

純白の菖蒲を咲かす濁り池
前梅雨の降りみ降らずみ菖蒲摘み
江戸系の紫を主に菖蒲苑
立葵幟のごとく揃ひ立つ
古民家の床の間に挿す半夏生草
野仏を石と見紛ひ夏薊
荒梅雨や幣張りつきし路地稻荷

青炎集

松本三千夫選

横浜 大内由紀

在所なる雨の驟や苔の花

雨雲や泰山木の終の花

大磯の寺二十箇所虎が雨

蠍座の人と諍ひ氷水

葉を合はす夕べの合歡や紅ほのか

そぞろ神の誘ふごとし夕焼空

横浜 山本茂子

梅漬けて重石気になる目覚めかな

青空と気儘の似合ふねぢれ花

花南天ゆれて朝日を零しけり

病む人に合はせぬ瓜の塩加減

平凡なる暮し彩り大夕焼

覗き込み交はず笑顔や夏帽子

横浜 布施由岐子

座せしまま果てぬ泰山木の花

里山は散歩日和や日雀鳴き

芝の上を付かず離れず梅雨の蝶

倒木に小さき命や五月山

サンダルをよろこぶ足裏梅雨晴間

香を帯にとどむるトマト丸かじり

横浜 久保田優子

うから寄り卒寿を祝がれ夏料理

父の日や遺愛の壺に庭の花

予後の良き蚩袋を愛づる我子

夕焼けを火の帯とせるタワーかな

気に入りの日傘を杖や歩の難く

引越しの孫の振りたり夏帽子

横浜 都留百太郎

蜘蛛の囀の白くつきりと今朝の雨

ぐづる子に婆の出番や天花粉

青田風母の幻影連れて来ぬ

風入れや千干で記す通信簿

吹割の渦の逆巻く瀧しぶき

沖を見て夏服さらり脱ぐ少女

横浜

波多野孝枝

観音の裳裾揚羽の身じろがず

剣道の竹刀の音や梅雨曇

菩提寺の水琴窟や夕涼し

贅沢は敵とつぶやき茄子を焼く

軒に吊り一夜干す飛魚あご里泊り

炊き上がる飯の香りや茗荷採る

横浜

片岡さか江

饒舌なる媪八十路や青山椒

池巡る足を止めぬ臺の声

手を打つや緋鯉に遅れ亀二匹

湧く雲へ竜のごと伸ぶ凌霄花

青鷺の凜と立ちたる静寂かな

胸ぬちに憂きこと一つ髪洗ふ

横浜

三橋玲子

総身に享くる至福や新樹光

斑猫や衣装似あはぬ強おもて

蚕豆や幼と剥きし日の遙か

羅や風の間にまに袖かろし

鳥声の公園跨ぐ朝の虹

潮騒の村に浜木綿暮れのこる

横浜

山崎稔子

参道にあふれ涼しき樹々の風

楊梅の熟れて石屋の猿の像

紫陽花や宿痾負ひたる幼な友

八橋の遅速分けたり菖蒲園

開発の宅地に残り合歓の花

くねくねと鍬先抜くる蚯蚓かな

横浜

柚木澄

梅雨出水常のせせらぎ轟轟と

初蟬や樟の大樹の梢より

しなやかに風を見せをり今年竹

水遣りも仕事のひとつ七変化

姉見舞ふ雲を纏へる夏の富士

紫陽花の開花を見ずに姉逝けり

横浜

和田慈子

パーゴラに百の傘揺れ虎が雨

時の日や呼び出されたる電子音

水音を枕の旅寝明易し

風鈴や昭和の残る通過駅

小流れに色を深めて四葩かな

千社札禁ずる寺や揚羽蝶

耕 土 集

黒滝志麻子選



粹人の妙味の幅や茄子漬

浦安 東 正則

螢火の明滅愛を語るかに

田中 春江

焼魚の上手き漢やキャンプ村

大樹の闇奥へ奥へと恋螢

木道や露の広葉に熊の影

蓮の葉や水滴ひかる小宇宙

鯨来るといふ夏の海荒れにけり

今年また友よりの梅ジャムを煮て
梅を干す母の仕種に似てきたり

万緑や大滑空の尾白鷺

柿の花風ありて落ち無くて落ち

横浜 塩川 君子

越後路の見渡すかぎり青田かな

新潟 太田チエ子

称名寺の静けさ破る墓の声

子房つけ南瓜の花の倒れをり

陳列の変はるや浴衣藍がよし

海沿ひの路地の坂道梅雨最中

狛犬の阿呬も喘ぐ炎天下

落日や紫紺に光る茄子をもぐ

素通りの出来ぬ店ありかき水

霊峰の裾野を囲む青田波

残りし人多くは逝きぬ沖繩忌

石川 博臣

梅雨寒や近づいて去る救急車

横浜 飛田 典子

上野山蓮咲く頃の日暮かな

額の花廃家の庭に誇りけり

ふる里は博多山笠夏祭

宿老の荒波くぐり昆布刈り

雉子車まはれまはれと夏は来ぬ

海の子ら下校路逸れて泳ぎ出る

沖繩忌叔父の名見ゆる碑銘あり

雲の峰移る夕日に華やぎぬ